追　悼

水島うらら博士（1927–2010）（出口博則）

広島大学大学院理学研究科生物科学専攻植物分類・生態学研究室

Hironori DEGUCHI: Dr. Urara MIZUSHIMA (1927–2010)

Department of Biological Science, Graduate School of Science, Hiroshima University,
1-3-1, Kagamiyama, Higashi-hiroshima, 739-8526 JAPAN
E-mail: koke@hiroshima-u.ac.jp



図 1．水島うらら先生．国際植物科学会議東京大会にて (IBC, Tokyo, 1993.9.l).

日本の蘚類の研究，とりわけツヤゴケ科の分類を専門とし，日本蘚苔類学会第 9 代会長を務められた水島うらら先生（図 1）が，2010 年 9 月 29 日悪性リンパ腫のため逝去された．享年 83 歳であった．同学会の歴史でただ一人の女性会長である．先生のご業績や経歴，人物像については，お嬢様の水島楓様から直接お伺いし，また，服部植物研究所の岩月善之助博士，首都大学東京の村上哲明教授から情報を得た．とくに，水島 (1988) は本稿をまとめる上での基本情報源であった．情報を寄せて頂いた各位に厚くお礼申し上げる．

経歴など

先生は 1927 年 1 月 2 日，父成田喜代治，母（加藤）慶（よし）の長女として東京都大田区でお生まれになった．父君は青森県弘前の出身で，数学と物理学に長け，上京して海軍兵学校に進み，海軍大佐となられた．兄は洪（ひろし）氏で現在もご健在である．

先生は横浜紅蘭女学校に入学され，そこで理科教諭から植物採集を通して植物学の手ほどきを受けられた．1944 年 3 月卒業後，4 月に共立女子薬学専門学校に進学され，そこで小泉秀雄教諭から植物分類学を学ばれた．このときに身につけた植物の観察方法，描画方法などが後の先生のご研究の基盤となって活かされていると述懐されている．1945 年 3 月 10 日の東京大空襲で，専門学校を休学し，当時長崎の三菱の工場で空気魚雷の設計など兵器製造に関わっていた父のもとに移り，同工場の化学の研究室で油の化学試験などの仕事に就かれた．父が会社を解雇され，島根県宍道に移り住むことになったが，長崎を離れた翌日，長崎に原爆が投下された．1947 年焼け野原の東京にもどり，共立薬学専門学校の 2 年生に編入されたが，小泉教諭は他界していた．しかし，植物学への情熱は冷めやらず，野外植物研究会に参加し，檜山庫三，牧野晩成，水島正美らから実践的観察法を学ばれた．また，東京大学理学部植物学教室にも出かけ，植物学の勉学に勤しまれた．教室の学生の中に，鉄かぶとをかぶりコーヒーを飲んでいたことで強烈な印象を与えた，当時学部 4 年生か大学院生であった水島正美とめぐり会い，後に東京大学の原　寛教授夫妻の媒酌で婚姻を結ばれた．1949 年 3 月に共立薬科専門学校を卒業後，同年 5 月，共立薬科大学教授で生物学と薬理学の担当教授であり，鉄道病院長も兼務していた，当時蘚類の分類では日本における第一人者的存在であ



図 2. 水島先生が整理された櫻井標本.

ったった櫻井久一の助手として請われ，蘚類の線描画の手伝いなどをしながら，1951 年 3 月まで勤められた. 水島先生はその助手の仕事について，“最初は相性が悪くて，やる気がしなかった”と述懐されているが，やがて蘚類の研究に徐々に興味を抱くようになられた.

1951 年 3 月，同助手の職を辞し，家事に従事されながら，夫君の伝で，原　寛，久内清孝，津山　尚，伊藤　洋，朝比奈泰彦，佐藤正巳ら，植物分類学の幅広い分野の一流学者の面識を得て，植物学の造詣を深められた. コケ関係では服部植物研究所の服部新佐をとおしてコケの専門家と知己を得られ，1953 年の御嶽山での合同調査にも参加されるなどして，当時のコケ植物の分類で精力的に研究活動を展開していた大分大学の野口　彰や埼玉大学の永野　巌，岸和田高校の中島徳一郎らと親交を深められた. コケの研究者との親交が一層深まり，やがて先生にはコケ植物の分類の専門家の道に進む思いが募り，学位を目指すようになられた. 櫻井久一の勧めで，日本産ツヤゴケ科 *Entodontaceae* の研究に着手され，その研究成果は 1960 年に，「Japanese *Entodontaceae*」として服部植物研究所報告 22 巻に掲載され，これにより翌年東京教育大学より理学博士の学位が授与された. 因みにコケ植物の分類で名をなした岩月善之助と尼川大録，地衣類の黒川　逍，藻類の千原光雄も同年同大学より同じく理学博士の学位を得ている.

先生は，1961 年 4 月に共立薬科大学講師に就かれ，翌年 4 月に同助教授となられた. 1961 年から晩年まで，財団法人服部植物研究所の研究嘱託に就いておられた. 1968 年 3 月に共立薬科大学を退職されてから 1986 年までの間に，東京都立大学理学部付属牧野標本館，小田原女子短期大学，日本大学商学部，跡見学園女子大学，上野学園大学音楽部，日本大学理工学部，東京農工大学大学院農学研究科の非常勤講師として教育にあたられた. しかし，研究の場は牧野標本館に置いておられたようで，正規の職員のように自由に研究されていたようである. 1984 年 9 月から 1997 年まで，上野学園大学短期大学部の教授として教育・研究に従事された. 1985–1987 年には日本植物分類学会評議員として学会運営にも寄与された.

櫻井コレクションの研究

櫻井久一の逝去（1963 年）に伴い，共立薬科大学に収蔵されていた同博士の約 2 万点のコケ植物標本（タイプ標本約 600 点を含む）が，夫君の水島正美が勤務する東京都立大学牧野標本館に寄贈されることになった. 受け入れにあたっては，都立大側から，水島うらら先生が週に一度，標本の整理にあたるという条件が付されたと同博士は自著の中で述べておられる. 先生の櫻井コレクション研究は，都立大学が首都大学となり八王子市にキャンパスが移ってからも続けられ，晩年まで続いた. この間（期間は不明），水島先生は都立大学の非常勤講師あるいは客員研究員の肩書きで研究に従事された. わたしは両キャンパスで先生にお目にかかり，櫻井標本の整理には先生でないと判らないようなことがあるので自分がそれをお手伝いしているということ，標本番号が出版物と標本ラベルで食い違いがあるものがあること，記載文と実際の標本で相違のあるものがあることなど，いくつかの標本を示しながら整理の困難さを

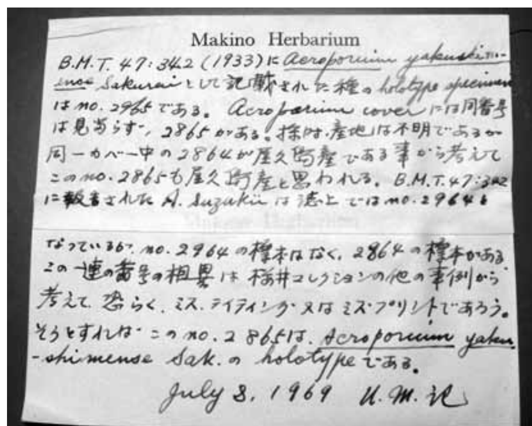

Makino Herbarium
B.M.T. 47: 342 (1933) に Acroporium yakushimense Sakurai として記載された種の holotype specimen は no. 2965 である。Acroporium cover には同番号は見当らず、2865 がある。採集・産地は不明であるが同一カバー中の 2864 が屋久島産である事から考えてこの no. 2865 も屋久島産と思われる。B.M.T. 47: 342 に報告された A. suzukii は誌上では no. 2964 となっているが no. 2964 の標本はなく、2864 の標本がある この一連の番号の相異は櫻井コレクションの他の事例から考えて恐らくミス・ライティング又はミス・プリントであろう。そうとすれば この no. 2865 は Acroporium yakushimense Sak. の holotype である。
July 8, 1969 U. M. 記

図 3. 櫻井標本に挿入されている水島先生の手描きメモ.

語られた．問題のある標本には手描きによる小さな文字でメモ書きした紙片が挿入されている（図2，3）．これらは今後の日本の蘚類の分類学的あるいは地理学的研究に大変貴重な情報であり，先生が遺された，隠れた意義深い業績として評価される．

著作と蘚類コレクション，献名

先生の著作は90編を超えるが，その大部分が蘚類の分類学的研究であり，1953年から1973年の20年間に20編の論文を本誌に掲載されている．今回、先生の約100件におよぶ植物に関わる出版物の目録をとりまとめたが，論文一覧は蘚苔類の専門誌に譲る．先生の採集された標本約800点は首都大学東京牧野標本館に寄贈され，保存されている．先生がご提案になった学名は2種，2亜種，3変種，5品種の新組み合わせと1新種と1新品種であるが，現在では1新品種を除き他はすべて他の種の異名とされている．先生に献名された学名として，先生が1952年8月25日に尾瀬ヶ原湿原で採集された標本に基づいて櫻井博士が1952年に本誌27巻9号282頁に記載したヤナギゴケ科のオニシメリゴケ *Hygrohypnum mizushimae* Sakuraiがあり，これは現在ヤナゴゴケ属 *Leptodictyum* の種として扱われている．

研究姿勢とお人柄，趣味など

水島先生のご業績を概観すると，蘚類の分類，特にツヤゴケ科の分類が中心であるが，植物命名規約にとりわけ強く，学名に関する論文が多いことがそのことをよく示している．岩月 (2011) も同様のことを体験談に記している．先生の研究者としての厳しい目が，ときには他の研究者による論文中の学名の処理に対して向けられたことがあり，1971年に広島大学大学院修士課程に入学し，コケの研究をはじめたばかりのわたしはこのとき，水島先生に対して“こわい先生”という印象をもってしまい，自分が歩みはじめた分類の研究の道が険しいものであると身が引き締まる思いがした．しかし，日本蘚苔類学会の会長になられた頃の先生は，わたしにはとてもやさしい，お話好きで，お世話好きで親切な，気さくな先生であった．また，とても筆まめで，いつも美しい便箋でお便りを頂いた．

先生の晩年の著作として，2000年秋に牧野富太郎著「植物一家言」の現代文での刊行があげられる．原著の現代文訳のためには多数の註記が必要になり，それに多大の時間と精力をかけて当たられたのが水島先生であった．その註について同書の監修者である小山鐵夫博士が「微に入り細に入り細を穿つもの」と記されている．専門のコケの研究論文では窺い知れない，先生ならではと思われる豊かな教養・知見，そしてお人柄が窺えるものである．お嬢様の楓様からお伺いしたところでは，先生は学生時代から短歌をたしなまれたそうで，とりわけ長塚　節の作品に傾倒されたとのことである．お嬢様のために飼われていた2頭の大型犬（雄のシェパードのレオと雌のボルゾイ犬の巴）を先生もこよなく愛しまれた．小柄な先生の体躯にやや不釣り合いに大きなワンボックスカー（トヨタ•ハイエース）で，休日には愛犬を乗せ，ドッグショーにも，野外調査にもよくお出かけになったようである．

水島先生からは学生時代から毎年年賀状をいただいた．「恭賀新年」の文字と簡易印刷機で作製された個性あふれる先生の手描きの干支にちなむコケの絵を組み合わせたもので，毎年楽しみにしたものである．謹んで先生のご冥福をお祈りする．

引用文献

岩月善之助 2011. 水島うらら博士を偲ぶ．蘚苔類研究 **10**(4) : 111–112.

水島うらら 1988. コケ食う虫も好き好き. 日本の生物 **2**(11): 5–9.